

三方一両損

さんぼういちりょうぞん
「三方一両損」という古典落語があります。江戸
の南町奉行、大岡越前守忠相の名さばきをテーマ
えちぜんのかみただすけ
にした噺です。

大工の吉五郎という男が小判三両を落とし、拾った左官の金太郎という正直者が財布にあった書きつけをたよりに、吉五郎に三両を届けにいきます。しかし、吉五郎は、落としたからには俺の金ではない、持って帰れ、と言ひ、金太郎は、てやんでえ、と譲りません。三両は大金ですから、南町奉行所が仲裁に入ります。

二人が引かないと見た大岡越前守は、いったん三両を自分のものとした上で、それに一両を足して吉五郎と金太郎それぞれに二両を与えます。三人が一両ずつ損をすることで一件落着としたのです。

円満に収まるトラブルの多くは、今でもこれと同じだと私は思います。ちょっと自分は損をしたな、でも良かった、と当事者の誰もが思えば、ほとんどのめ事は円満に収まるのかも知れません。



学長 島田 修三